

## 「夜をこめて」再考 —『枕草子』第130段前半を読み解く—

諸井 彩子

### A Restudy of 'Yo-wo-kome-te' — Interpretation of the First Half of the 130th verse of "The Pillow Book" —

MOROI, Ayako

#### 要旨

これまで、『枕草子』第130段の清少納言歌の「夜をこめて」という表現は、①「まだ夜の明けないうちに」、②「一晩中」、③「夜が深いうちに」という三つの解釈がなされてきた。本稿ではまず、「夜をこめて」という表現が、清少納言と藤原行成のどのような会話で生まれたのかを考察した。二人の会話は、後朝の文を装った行成に対し、それに乗りつつも不実をなじる清少納言、という形で展開している。清少納言の「夜をこめて」という表現は、行成が午前一時より前に清少納言のもとを辞したことを前提とする表現であることを示した。続いて、『枕草子』の同時代までの「夜をこめて」の用例を挙げて考察し、「一晩中」という解釈が不当であることを示した。これらの考察から、当章段の「夜をこめて」は「夜が深いうちに」と解釈すべきことを明らかにした。

#### キーワード

枕草子、清少納言、藤原行成、百人一首、夜をこめて

#### Abstract

Until now, there have been three interpretations of the expression 'yo-wo-kome-te' in Sei-Shonagon's poem in the 130th verse of "The Pillow Book": (1) 'before dawn,' (2) 'all night long,' and (3) 'while the night is deep'. In this paper, I first examine how the expression 'yo-wo-kome-te' originated in a conversation between Sei-Shonagon and FUJIWARA Yukinari. The conversation between the two developed in the form of Yukinari pretending to be a poet of the later dynasty, and Sei-Shonagon taking advantage of his pretensions but criticizing his untruthfulness. I have shown that Sei-Shonagon's expression 'yo-wo-kome-te' is based on the premise that Yukinari left Sei-Shonagon before one o'clock in the morning. Then, I discussed the examples of the use of 'yo-wo-kome-te' in "The Pillow Book" up to the same period, and showed that the interpretation of 'all night long' is unjustified. From these considerations, it is clear that 'yo-wo-kome-te' in this chapter should be interpreted as 'while the night is deep'.

#### Key words

"The Pillow Book (Makura-no-soshi)", Sei-Shonagon, FUJIWARA Yukinari, "Hyakunin-issshu", Yo-wo-kome-te

#### はじめに

『枕草子』第130段「頭弁の、職にまゐりたまひて」は、『後拾遺集』に入集し『百人一首』にも採られた清少納言の代表歌「夜をこめて鳥のそら音にはかるとも世に逢坂の関はゆるさじ<sup>1</sup>」の詠歌事情を語る、著名な章段である。これまで多くの研究によって論じられており、清少納言の和歌についても、『後拾遺集』『百人一首』の注釈書類を含めて考察されてきた。

近年、小林賢章氏は、清少納言歌の初句「夜をこめて」に注目し、章段の内容の検討と和歌の用例を挙げた上で、「夜をこめて」は午前3時までの時間帯を意味する用法と午前3時以降を意味する用法の二つが存在し、多くが午前3時の日付変更点を意識して使用されていること、清少納言歌では丑の刻（午前

1時）頃から午前3時の間を指し、「一晩中」「夜通し」と現代語訳すべきことを提唱している<sup>2</sup>。小林氏の説を検証した吉海直人氏は、小林氏の挙げていない和歌の用例の考察も含めた上で、「夜をこめて」を午後11時から午前3時までとみなす提案をしている<sup>3</sup>。

本稿では、『枕草子』第130段の前半部分について、時間表現の確認、相手の発言への切り返しという二点を中心に再検討し、「夜をこめて」がどのような文脈で使われたかを考察する。その上で、和歌の用例を挙げ、清少納言歌の「夜をこめて」をどのように現代語訳すべきか、私見を述べたい。

なお、散文作品の引用は新編日本古典文学全集（以下「新全集」）、韻文作品の引用は新編国歌大観に拠る。

## 一、先行研究の整理

小林氏が挙げる「夜をこめて」歌の現代語訳は、『枕草子』『後拾遺集』『百人一首』のおもだった注釈書類を含めて十五種類に及ぶ。吉海氏は、小林氏が調査した「夜をこめて」の解釈が、①「まだ夜の明けないうちに」系、②「一晚中」系、③「夜が深い」系に三分類でき、①③が夜明けまでのある時点（瞬間）を表すのに対し、②は夜の間ずっとという継続を表しており、大きく二つの解釈が存在することを指摘する。

ここでは、紙幅の都合上『枕草子』の注釈書類を中心に「夜をこめて」の解釈を挙げ、傾向を確認しておきたい。

- ・逍遙軒ノ云ク、夜深きに偽りの鳥をたばかり給ふとも、此逢坂は、函谷のごとくにゆるすまじきと也。

（北村季吟『春曙抄』<sup>4</sup> 逍遙軒こと松永貞徳の説）

- ・行成の夜ふかく帰心あさきをまきはさんとして鳥の音にもよほされしとたはかるともその分にては逢まじと也

（岡西惟中『清少納言旁註』<sup>5</sup> 左注）

古注は「夜をこめて」を「夜深く」と解釈しており、吉海氏の分類によれば③の「夜が深い」系ということになる。

- ・にせの鶏声は深夜に函谷関の番人をだましたとしても、逢坂の関はそうは参りません。巧いことを言われても私は決して逢いませんの意。

（池田亀鑑校注『日本古典文学大系』岩波書店 1958年）

- ・夜通し鶏のうそ鳴きでだまそうたって絶対一線を越えることにはなりませんよ<sup>6</sup>。

（萩谷朴校注『新潮日本古典集成』新潮社 1977年）

- ・夜ふけに鶏のいつわりの鳴き声でだまそうとしても、男女あい逢う逢坂の関をこえるようなことはいたしませんよ。

（石田穰二訳注『枕草子 付現代語訳』角川文庫 1979年）

- ・一晚中、偽りの鶏鳴でだまそうとしても、逢坂の関は開きませんからね。

（渡辺実校注『新日本古典文学大系』岩波書店 1991年）

- ・夜のまだ明けないうちに鶏の声色で函谷関の関守をだますとしても、けっしてこの男女相逢うという逢坂の関は、だまされて許すようなことはしないつもりです。

（松尾聰・永井和子校注・訳

『新編日本古典文学全集』小学館 1997年）

比較的手に取りやすい近年の注釈書類を確認すると、吉海氏が整理されたように解釈は三分類できることが明らかになる。『新潮古典集成』が「夜通し」、その後『新日本古典文学大系』が「一晚中」と現代語訳しており、②「一晚中」系は比較的新しい解釈であるようだ。

## 二、『枕草子』第130段の再検討（一）

### —時間表現の確認—

それでは、清少納言歌がどのような状況で詠まれたのか、『枕草子』第130段（以下、当章段）の前半部の再検討をしていきたい（説明の便を図って下線を付し、場面を四つに分けた）。

頭弁の、職にまゐりたまひて、物語などしたまひしに、夜いたうふけぬ。「明日御物忌なるに籠るべければ、丑になりなばあしかりなむ」とてまゐりたまひぬ。（…a）

つとめて、蔵人所の紙屋紙ひき重ねて、「今日は、残りおほかる心地なむする。夜をとほして、昔物語も聞え明かさむとせしを、鶏の声にもよほされてなむ」と、いみじう言おほく書きたまへる、いとめでたし。（…b）

御返りに、「いと夜深くはべりける鳥の声は、孟嘗君のにや」と聞こえたれば、（…c）

立ち返り、「『孟嘗君の鶏は函谷関をひらきて、三千の客わづかに去れり』とあれども、これは逢坂の関なり」とあれば、

「夜をこめて鳥のそら音にはかるとも世に逢坂の関はゆるさじ

心かしこき関守侍り」と聞こゆ。また、立ち返り、

「逢坂は人越えやすき関なれば鳥鳴かぬにもあけて待つとか」（…d）

藤原行成が「頭弁」と呼ばれたのは、長徳元年（995）8月29日以降、長保3年（1001）8月23日に参議に任じられるまでの期間であり、中宮定子が職の御曹司にいたのは①長徳3年（997）6月23日～長保元年（999）正月3日、②長保元年（999）6月14日～8月9日の二度にわたる。そのうち、『権記』<sup>7</sup>長保元年（999）7月18日条「内に候ず。今夕、召しに依りて中宮に参る。又、帰り参る。」が当章段の行動と一致しているが、『小右記』7月19日条に「雨を冒し、内に参る。」<sup>8</sup>とあり、御物忌である条件を満たさないという指摘がある<sup>9</sup>。ただ、天皇の御物忌であっても、たとえば『権記』長徳4年正月7日条は、天皇の出御こそなかったが白馬節会が行われており、節会に関連して行成が御所に参り、文書ではなく「詞」で奏上するなどの行動が記される。したがって『小右記』7月19日条を、御物忌を否定する証拠として挙げることはできない。一方で、『権記』7月19日条に「御物忌」とは記載なく、当章段の確実な日時はわからない。

（a）行成が帰った時間

清少納言と行成は、「物語などしたまひしに、夜いたうふけぬ」とあるように、夜更けまで話をしていた。といっても、行成は「丑になりなばあしかりなむ」と言って帰っていったので、丑の刻（午前1時～3時）になるより前、子の刻（午後11時～午前1時）の段階であったことがわかる。

内の御物忌に籠もる場合は、丑の刻に参内するという慣例があった<sup>10</sup>。

御物忌時初参籠人。丑時可参之。(『禁秘抄』下「御物忌」<sup>11</sup>)  
丑の刻には参内しなくてはならないため、行成は遅くとも午前1時になる前に、清少納言のもとを辞したのである。

(b)「聞え明かさむ」と「鶏の声」

翌朝、行成から「夜をとほして、昔物語も聞え明かさむ」としたのに、「鶏の声にもよほされて」(しまったのでできなかった)と手紙が届いた。これは後朝の文を装って行成が仕掛けた「遊び」とみることができる。

この「聞え明かす」の解釈については、「暁」に関する小林氏の一連の論考<sup>12</sup>をふまえる必要がある。小林氏によれば、当時の「明く」は、現代の夜明け(日の出)の意味だけでなく、寅の刻(午前3時)を過ぎて日付が変わることを指すこともあった。「暁」は、その寅の刻から日の出までの時間を指す語であり、逢瀬をもった男女が別れなければならない時間である。後者の「明く」を示す例として、光源氏と朧月夜が逢瀬をもった次の場面が挙げられる。

ほどなく明けゆくにやとおほゆるに、ただここにしも、「宿直奏さぶらふ」と声づくるなり。またこのわたりに隠ろへたる近衛官ぞあるべき、腹ぎたなきかたへの教へおこするぞかし、と大將は聞きたまふ。をかしきものからわづらはし。ここかしこ尋ね歩きて、「寅一つ」と申すなり。女君、心からかたがた袖をぬらすかなあくとしふる声につけても

とのたまふさま、はかなだちていとをかし。

(『源氏物語』賢木巻)

「寅一つ」に対して「あくとしふる」と朧月夜が歌を詠んでいることが注目される。この場面について、<sup>13</sup>が「とらの時より明日の日にとるなり」と記しているのも参考になる。

小林氏によれば、動詞「明かす」についても、上接する他の動詞と複合語を作る場合も含めて、午前3時まで時間を過ごすことを意味する例があるという<sup>14</sup>。そこで、本章段と同様「聞こえ明かす」の例を挙げておきたい。

「御文を焼き失ひたまひしなどに、などで目を立てはべらざりけん」など、夜一夜語らひたまふに、聞こえ明かす。

(『源氏物語』蜻蛉巻)

匂宮のもとを侍従が訪れ、浮舟入水の状況を伝える場面である。このあと侍従は、宇治に「暁に帰る」とあり、明るくなるまでいたわけではない。一方で、次のような例もある。

長き夜すがら聞こえ明かし給ふに、明方の月心細きに、空は浅緑にさえわたりて、雪の光りあひたるほど、尽きせずうち語らひて、ながめ出で給へるさまども、この世ならずぞめでたきや。(『浜松中納言物語』巻四)

この場面では空が明るくなってきており、午前3時までではな

く、日の出までの時間を過ごす例とみることができる。

行成の「聞え明かさむ」の場合は、後朝の文を装って、午前3時を過ぎて男性が女性のもとを離れなければならない時間が意識されていたはずである。鶏鳴は後朝の別れの時刻を告げるものであり、まだ暗い午前3時過ぎを指しているからだ<sup>15</sup>。逢瀬をもった男性が、名残惜しく感じながらも帰途につかなくてはならない状況を示す常套表現なのである。

・とほきいもとたまくらやすくねぬるよはにはとりなくなあけはすぐとも(『赤人集』287)

・いにしへ、ゆきさきのことどもなどいひて、

秋の夜の千夜を一夜になずらへて八千夜し寝ばやあく時のあらむ

返し、

秋の夜の千夜を一夜になせりともことば残りてとりや鳴きなむ

いにしへよりもあはれにてなむ通ひける。

(『伊勢物語』第22段)

・むかし、男、あひがたき女にあひて物語などするほどに、とりの鳴きければ、

いかでかはとりの鳴くらむ人しれず思ふ心はまだ夜ぶかきに(『伊勢物語』第53段)

特に『伊勢物語』の例は、「ことば残りて」(第22段)や「物語などするほどに、とりの鳴きければ」(第53段)とあり、「昔物語も聞え明かさむとせし」という言葉とも合うことから、行成が意識していた可能性が高い。

ただし、次の例をみると、鶏が午前1時前に鳴いたとするのは無理がある。

入道前太政大臣法成寺にて念仏おこなひはべりけるころ後夜の時にあはんとてちかきところやどりてはべりけるにとりのなきはべりければむかしを思ひいでてよみ侍ける

るでのあま

いにしへはつらくきこえしとりのねのうれしきさへぞ物はかなしき(『後拾遺集』1019)

仏道における「後夜」は午前3時から午前5時を示す。後夜の時間に会う約束をしていたところ、鶏が鳴き、かつては別れの時間の合図であった鳥の音が、今は会う時間の合図となっていることに感慨を覚えて詠じた歌である。行成の言葉はあくまでも冗談であり、そこに、次項三の(c)で述べるような、清少納言の切り返しのつけいる隙があったわけである。

なお、行成の手紙は、「蔵人所の紙屋紙ひき重ねて」「いみじう言おほく書きたまへる」もので、清少納言は「いとめでたし」と評している。小林氏<sup>①</sup>は、この「いとめでたし」を、行成の「言おほく書きたまへる」という行為、誠実さについての言としているが、後文に「僧都の君いみじう額をさへつきて取りた

まひてき」とあるように、能書家として名高い行成の字の素晴らしさを評したものとすべきである。

形容詞「めでたし」は、「めでいたし」が原義とされ<sup>16</sup>、『枕草子』第84段「めでたきもの」で、見た目に魅力的なものが挙げられていることが参考になる。冒頭部分を引用しておこう。

めでたきもの 唐錦。飾り太刀。作り仏のもく糸。色合ひ深く、花房長く咲きたる藤の花、松にかかりたる。

書について用いられている例としては、次の場面が挙げられる。

貫之が手づから書きたる古今二十卷、御子左の書きたまへる後撰二十卷、道風が書きたる万葉集などと添へて奉らせたまへる、世になくめでたき物なり。

（『栄花物語』巻第十九「御裳ぎ」）

ここでは、後代、三蹟の一人として行成と並び称される小野道風の書を含めて「めでたき物」としている。このように、「めでたし」は、「誠実さ」のような人間の性格や内面の魅力を表す語としては用いられていないのである。

### 三、『枕草子』第130段の再検討（二）

#### 一切り返しの応酬—

#### （c）清少納言の切り返し

後朝の和歌の常套表現を意識して手紙をよこした行成に対し、清少納言は、行成が帰ったのが子の刻であったことから、「いと夜深くはべりける鳥の声は孟嘗君のにや」と返事をした<sup>17</sup>。「孟嘗君のにや」は、「孟嘗君の故事のように、うそ鳴きではないですか」の意味であり、「私のもとから早く帰りたくて、鳴いてもいない鶏を、鳴いたといっただけでしょう」ということになる。『史記』の孟嘗君列伝には「夜半至函谷関」とあり<sup>18</sup>、単にうそ鳴きというだけではなく、行成が午前1時前に帰ったという点にも対応する故事だったことがわかる。

ここではまず、行成が帰った子の刻（遅くとも午前1時前）を指して、「夜深く」という語が使われている点に注目したい。「鶏の声」の例で挙げた『伊勢物語』を再掲する。

むかし、男、あひがたき女にあひて物語などするほどに、とりの鳴きければ、

いかでかはとりの鳴くらむ人しれず思ふ心はまだ夜ぶかき（『伊勢物語』第53段）

鶏鳴を耳にした男は、思いが尽きないことを「夜深し」の語で表現する。また、『伊勢物語』第14段では、男性が夜深いうちに帰ってしまったことに対し、女が鶏を恨む歌を詠む。

夜ぶかくいでにければ、女、

夜も明けばきつにはめなでくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる

「鶏の声」という語を目にした清少納言の脳裏に、これらの和歌がよぎった可能性は高い。

文学作品における「夜深し」については、小松光三氏の論考<sup>19</sup>

と、それをふまえた吉海氏の論考<sup>20</sup>が参考になる。小松氏は、「夜深し」が家を出るという行為と結びついた場合、夜明け近くを表現するという傾向があり、その多くが「早すぎる」という評価を含んでいることを指摘した。これをふまえると、『堤中納言物語』『花桜折る中将』の一節「夜深く起きにけるも」は、夜明け近くに起き、女のもとを去る少将の行動を、異常に早いという意味合いを込めて表した表現ということになる。これに対し吉海氏は、「暁」に関する小林氏の一連の研究をふまえ、後文に帰宅の途中で桜の美しく咲いている家を垣間見た少将が、「やうやう明くれば、帰りたまひぬ」と帰宅していることから、ここが視覚的な夜明けであり、その前の「夜深く起きにける」は「夜明け近くに起き」ではないとする。その上で、「夜深し」が指す時間帯として、広義では宵から暁までの広い範囲を指すが、寅の刻の初め頃、すなわち暁の初めの頃とする提案をしている。

確かに「花桜折る中将」の「夜深く」を日の出近くとする解釈には従えないが、「夜深し」に「早すぎる」という評価、それもマイナスの評価があるとする小松氏の指摘は首肯される。

- ・まめやかにめざましと思し明かしつつ、例のやうにものたまひまつはさず、夜深う出でたまへば、この子は、いといとはしくさうざうしと思ふ。（『源氏物語』空蟬巻）
- ・さてはづしてむはいと口惜しかければ、まだ夜深う出でたまふ。女君、例の、しぶしぶに心もとけずものしたまふ。（中略）門うち叩かせたまへば、心も知らぬ者の開けたるに、御車をやら引き入れさせて、大夫妻戸を鳴らしてしはぶけば、少納言聞き知りて出で来たり。「ここに、おはします」と言へば、「幼き人は大殿籠りてなむ。などか、いと夜深うは出でさせたまへる」と、もののたよりと思ひて言ふ。（『源氏物語』若紫巻）

空蟬巻の場合は、空蟬と逢瀬をもつことができなかった光源氏が、「思し明かし」（この「明かし」は午前3時を過ぎる意であろう）て「夜深う」紀伊守邸を出る。若紫巻の例は、若紫を二条院に引き取る際のもので、父宮のもとに連れて行かれる前にと、光源氏は葵の上のもとを「夜深う」出る。そうでなくてもじっくりいかなない仲であるのであるから、葵の上の反応が「しぶしぶに心もとけず」であったことも無理はない。そのまま一旦自邸に戻って着替えた光源氏は、車で若紫のもとを訪れる。乳母の少納言が「などか、いと夜深うは出でさせたまへる」と非難しているのは、どこかの通い所からの帰途であろうと推測したからである。夜深い時間に女性のもとを辞し、別の女性のもとを訪れるというのは、不実な男性の行動の典型である。

光源氏が相手に心惹かれない逢瀬にも、「夜深し」が使われる。

- ・正身は、ただ我にもあらず、恥づかしくつつましきよりほかのことまたなければ、（中略）心得ずなまいとほしとおほゆる御さまなり。何ごとにつけてかは御心のとま

らむ、うちうめかれて、夜深う出でたまひぬ。

（『源氏物語』末摘花巻）

・かの御夢に見えたまひければ、うちおどろきたまひて、  
いかにと心騒がしたまふに、鶏の音待ち出でたまへれば、  
夜深きも知らず顔に急ぎ出でたまふ。

（『源氏物語』若菜上巻）

若菜上巻では、紫上と光源氏の心情を描くのに主眼がある場面だが、鶏鳴にかこつけて帰る光源氏は、女三宮に対して最低限の礼儀を果たしただけで、誠実な態度とは言いがたい。

このように、男性が女性のもとを「夜深く」去る場合、そこには男性の不実な態度への非難が含まれる場合が多い。しかも、行成が清少納言のもとを去ったのは午前1時前なのであるから、「いと夜深くはべりける」と清少納言が返事を書いたのも当然のことであった。午前1時前に女性のもとを去るというのは、この後に別の女性のもとを訪れることを疑われても仕方のない時間帯であったはずである。

清少納言の切り返しの巧みさは、単に『史記』孟嘗君列伝に見える故事を引用したことに留まるものではない。行成が後朝の文を装って「鶏の声」を持ち出したのに対し、清少納言は後朝の文への返事を装い、「夜深く」鳴いた鶏、しかもそれはうそ鳴きである、と行成の不実さを二重になじる方向で切り返してみせたのである。この清少納言の返事について、藤本宗利氏は「実に見事な応答」と評し、次のように述べる<sup>21</sup>。

（3）の消息（稿者注：行成の手紙）においては、「別れを促す憎むべき存在」であったはずの「鶏」というモチーフが、（4）の返事（稿者注：清少納言の返事）に用いられる際には反対に、「脱け出したがっている男に帰るきっかけを与える天恵・帰るための口実」にすり換えられているからである。還元すれば、男が自己の愛の深さを示すべきものとして選んだモチーフが、そのまま男の不実の指標に転換された結果となったのである。

清少納言の切り返しの巧みさが際立つが、行成はこれにどう答えるのだろうか。

（d）逢坂の関

後朝の文を装って、清少納言に「遊び」を仕掛けた行成であったが、漢籍までふまえて見事に切り返されてしまった。そこで行成がさらに仕掛けたのが、清少納言が持ち出した函谷関の故事に納得したように見せながら、「逢坂の関」という歌枕を出して、あくまでも後朝の歌を装った返事をするのであった。行成は現代の「ノリツッコミ」にも通ずるような切り返しとして、清少納言の「いと夜深くはべりける鳥の声は、孟嘗君のにや」に対して、『孟嘗君の鶏は函谷関をひらきて、三千の客わづかに去れり』とあれども、これは逢坂の関なり」と答えている。この「逢坂の関なり」は、「逢坂の関の鶏（の声）なり」の意味であったはずである。

逢坂の関は、延暦14年（795）に廃止され出入り自由であったが、その後も、男女が逢瀬をもつこと、逢瀬の障害を示すものとして和歌に詠まれる歌枕である。行成が「函谷関」から「逢坂の関」に切り返したことについては、これまで二つの関のあり方の違いが指摘されてきた。藤本氏前掲書は、「函谷関」はその関を越えて脱出しようとする遠心的な心象、「逢坂の関」は障害を越えて目的地に向かうことを願う求心性を含む心象であると指摘する。また、吉海氏<sup>②</sup>は、「函谷関」と「逢坂の関」は実態（ベクトル）が正反対になっており、「鶏鳴」が男女の逢瀬にまったく機能しないものであると指摘している。

しかし、行成の切り返しは、「鶏がつきもの」という点で共通する関を出しての切り返しであったとみてよい。

・相坂のゆふつけどりもわがごとく人やこひしきねのみなくらむ（『古今集』536）

・中納言源ののぼるの朝臣のあふみのすけに侍りける時、よみてやれりける 関院

相坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆききをなくなくも見め（『古今集』740）

「逢坂」が鶏とともに後朝の歌に詠まれることもあった。

・こひこひてまれにこよひぞ相坂のゆふつけ鳥はなかずもあらなむ（『古今集』634）

これは『古今集』恋部の後朝の別れの歌の筆頭に置かれた歌である。行成はこの『古今集』歌を念頭におき、暗に「まれに逢瀬をもったときくらい鶏には鳴かないでほしかったのですが」と、あくまでも二人が後朝の別れをもったという「遊び」を続行させる返事をしたのである。

しかし、やはりここにも隙があった。もともと行成が清少納言のもとを辞したのは午前1時より前である。「いと夜深かりける鳥の声は孟嘗君のにや」と、不実をなじる形を装って清少納言が切り返したのもそれが理由であった。そこから「函谷関の鶏のうそ鳴きではない、逢坂の関（の鶏）だ」と言ったところで、女性と逢瀬をもつには遅すぎ、女性のもとから帰るには早すぎる時間である<sup>22</sup>。いずれも、女性からすれば不実な態度となじられても仕方がない。「逢坂の関の鶏」というモチーフを持ち出して、あくまで後朝の文の形を装おうとする行成に対し、清少納言は、「逢坂の関」ならばなおのこと、「夜をこめて」鶏のうそ鳴きをたくらんだとしても通行は許しますまい、と切り返す和歌を詠んだのである。

このように、清少納言の「夜をこめて」という表現は、行成が午前1時になる前、まだ夜深うちに帰ったことを前提としている。また、函谷関の故事においても和歌においても、鶏は繰り返し鳴くようなものとしては捉えられていない。「夜をこめて」を、「一晩中」「夜通し」というような、時間帯を示す表現とは解釈しにくいのではないだろうか。

#### 四、「夜をこめて」再検討

以上の当章段の再検討をふまえ、改めて「夜をこめて」という表現について考察していくことにする。前述のように、清少納言歌の「夜をこめて」の解釈には、①「まだ夜の明けないうちに」系、②「一晩中」系、③「夜が深い」系の三種類があった。①③は夜明けまでのある時点を表すのに対し、②は夜の間ずっとという継続を表しており、大きく分けると二つの解釈が存在することになる。

辞書類においては以下のような説明がある。

- ・（「よを籠む」項）まだ夜が明けないうちに。まだ暗いうちに。（小学館『全文全訳古語辞典』2004年<sup>23</sup>）
- ・（「よをこむ」項）（まだ夜を含んでいる意から）夜明けにならない時をいう。夜がまだ深い。まだ夜が明けない。（旺文社『全訳古語辞典』第五版 2018年）
- ・（「よを籠む」項）「夜籠もる」の他動詞的表現。「夜をこめて…する」という形で用いられる場合が多く、まだ夜明けまで間がある時間を選んで何かをすることを表す。（『角川古語大辞典』1999年）
- ・（「よを籠める」項）まだ夜が明けず、夜明けまでに時間がある間に…する。

（小学館『日本国語大辞典』第二版 2002年<sup>24</sup>）  
小学館『全文全訳古語辞典』と旺文社『全訳古語辞典』では①③のいずれをも挙げ、『日本国語大辞典』と『角川古語大辞典』は①ということになる。辞書類では②の「一晩中」系の解釈をしているものは見当たらなかった。

また、『古典基礎語辞典』（角川学芸出版 2011年）の「こむ」の項には次のような解説があった。

コモル（籠もる）と同根。下二段活用は、すでに上代から例があり、おもてに表さないように、深く納め入れる意を表す。（中略）霧や霞などの自然現象や夜・春・秋などについていう場合には、外から囲むようにある領域におおひ入れる意となる。また、この意味が目的格の助詞ニやヲをとらずに、自動詞として用いられると、あたり一面に満ちる意となる。

これによれば「夜をこめて」の場合も、夜を「外から囲むようにある領域におおひ入れる」という解釈になろう。金子元臣氏『枕草子評釈』（明治書院 1952年）が「夜をこめて」を「深夜に」と訳した上で、「「夜をこめて」は、夜を明方の部分に籠めての意にて、まだ夜の明けぬ頃をいふ」と述べているのが注目される。

小林氏①は、当章段の内容をふまえ、

「夜をこめて鳥のそらねははかるとも」は、「夜をとほして、むかし物がたりもきこえあかさむとせしを」を言い換えたことは明白であろう。<sup>25</sup>

として、丑の刻（午前1時）頃から午前3時まで「鳥のそら音」

をはかったものとする（すなわち「夜をこめて」の解釈としては②）が、これには従えない。清少納言が「鳥のそら音」と非難するのは、「夜をとほして、昔物語も聞え明かさむとせしを」の部分に対してではなく、午前1時より前に帰ったのに「鶏の声にもよほされてなむ」と言ったことに対してであるからだ<sup>26</sup>。

また小林氏①は、「夜をこめて」という表現が、午前3時の日付変更時点を意識して使用されているかどうかにかんして主眼をおき、午前3時までの時間帯を意味する用法と午前3時以降を意味する用法の二つがあると主張するが、ここまで考察してきたように、当章段の「夜をこめて」は午前1時より前に行成が帰ったことに対応する表現で、どちらの用法にもあてはまらない。「夜をこめて」を①「まだ夜の明けないうちに」系や③「夜が深いうちに」系で解釈することが不当であるならば、その理由を示すべきだ。むしろ、挙げている例<sup>27</sup>の中には、②「一晩中」系では解釈できない和歌がある。

伊勢の国にてしほのひたる程に、見わたりといふはま  
をすぎむとて、夜なかにおきてくるに、道も見えねば  
松ばらの中にとまりぬ、さて夜のあけにければ  
よをこめていそぎつれども松の根に枕をしてもあかしつる  
かな（『増基法師集』28）

小林氏①は、詞書の「夜なか」から「夜のあけにければ」までが、和歌の「よをこめて」が指す時間帯（すなわち②「一晩中」）であるとしているが、吉海氏①も指摘しているように、詞書が述べているのは「夜中に起きたが暗くて道がよく見えなかったので、結局動くことができずに松原の中に留まった」ということである。ここでの「いそぐ」は、準備するの意で、「よをこめて」は詞書の「夜なか」を言い換えたもの、「よをこめていそぎつれども」は、「夜なか」に起きて出発の準備をしたことと解釈するのが妥当である（③「夜が深いうちに」系に近い）。したがって、この例を根拠に、「いそぐ」のような継続動詞が後接する「夜をこめて」を、午前3時までの時間を示す副詞、特に何らかの動作を集中的に、熱心に行っているという付加の意味が加わっているとする小林氏①の検討には、誤りがあると言わざるを得ない。

さらに小林氏①では、②「一晩中」系とも異なる、「午前3時まで時を過ごして」という新たな解釈もしている。

- ・ 後朝心を  
夜をこめてかへらざりせばくずのはのあくともけさをう  
らみざらまし（『散木奇歌集』1173）
- ・ よをこめてあかでかへさのみちすがら心やすむる有明の  
月（『拾玉集』946）

小林氏①は、和歌における「夜をこめて」の考察のはじめにこの二首を挙げ、以下のように述べる。

これら二首のヨヲコメテは午前3時まで時を過ごしての意味であることがわかる。もちろん、日付変更時点を意識し

て、ヨヲコメテは使用されている。

源俊頼の歌の初・二句を、「午前3時までを過ごした後、帰らなかったら」という仮定条件としているのである。しかしながら、男性が女性のもとに通う当時の社会的慣習を前提とした後朝の心を詠む歌において、「男性が帰らなかったら」という仮定条件は成り立たない。この歌の「うらみ」は、「夜をこめて」、すなわち本来よりも早く帰ったことに対応しており、③の「夜が深いうちに」系の解釈がふさわしい。慈円の歌も夜が深いうちに帰らなくてはならない状況を詠んだもので、それが「あかで」（満ち足りない）という表現につながるのである。

このように小林氏①には、当章段の「夜をこめて」について、「夜をとほして、昔物語も聞え明かさむとせしを」を言い換えたものだから「一晚中」と解すべき、とする解釈の誤りを、そのまま他の和歌の解釈にも利用しているのではないかと疑われる例が散見される。

以下に、小林氏①が挙げていないものも含め、『枕草子』と同時代までの用例を挙げるが、全ての用例が①「まだ夜の明けないうちに」あるいは③「夜が深いうちに」で解釈できる。

- ・ はるの夜、月をまちけるに、山がくれにて心もとなりければよめる  
くらはしの山をたかみかよをこめて いでくる 月のひかりともしも（『猿丸集』8）
- ・ みつね  
あはんとてまつゆふぐれとよをこめてゆくあか月といづれまされり（『忠岑集』108）  
ただみね  
まつほどはたのみもふかし よをこめて ゆくあか月のことはまされり（109）
- ・ このもとにこよひはねなむ桜花また よをこめて も散りもこそすれ（『躬恒集』295）
- ・ 七月七日にこよひのほしあひみんとてはしにゐたりけるに、しのびてみてのあしたに  
あまの河かはべの霧の中分けてほのかにみえし月の恋しさ（『兼盛集』41）  
返し  
こひしくは河瀬のきりの よをこめて 立ちかへらず ぞあかしはてまし（42）
- ・ 宮に大夫のくすりいれてたてまつりたりけるくしのはこをほどへて秋立つ日かへすとて、いろいろの花どもをいれてかへさせ給ふとて  
初かぜにのどけき花の露ならばおきてみつべき玉くしげかな（『公任集』90）  
とかかせたまうけるを、かくもいひてんかしとみたまうける  
よをこめて おきける露の玉くしげあけてののちぞ秋とし

りぬる（91）

『猿丸集』8の「夜をこめて」は「いでくる」にかかる連用修飾語、『兼盛集』42では「立ちかへらず」にかかる連用修飾語になっており、いずれも②「一晚中」では解釈できない。

『忠岑集』に見える躬恒と忠岑の問答の「夜をこめて」については、吉海氏①が、「一晚中共寝して（した後で）」と解すべきと指摘するが、小林氏①が挙げた『散木奇歌集』1173番歌を「午前3時まで時を過ごして」と解釈するのが不当であることは前述した。当章段の「夜をこめて」が、「はかる」にかかる連用修飾語であると同様に、「よをこめてゆく」は「よをこめて」が「ゆく」にかかる連用修飾語になるはずで、明るくなる前に女性のもとから帰る（「ゆく」）心情のつらさを詠んだ歌と解すべきである。同様の歌は、

- ・ これたふの朝臣にかはりてよめる 永源法師  
よをこめて かへるそらこそなかりつれうらやましきはありあけの月（『後拾遺集』666）

にも見えるが、この例でも「よをこめて」は「かへる」にかかる連用修飾語であり、「かへる」を一晚中続けるのではなく、夜深いうちに帰らなくてはならない心情を詠んだ歌である。

このように、『枕草子』の同時代までの「夜をこめて」の歌を確認してきたが、②「一晚中」系の解釈でないと成立しないものはなかった<sup>28</sup>。それをふまえると、当章段における清少納言歌の「夜をこめて」も、①「まだ夜の明けないうちに」系か、③「夜が深い」系、特に午前1時前という時間を考えれば「夜が深いうちに」と解釈するのが妥当であろう。

## おわりに

本稿では、「夜をこめて」という表現をどう解釈すべきか探るべく、どのようなやりとりの中で生まれた表現であるかを確認した。行成は午前1時になる前に清少納言のもとを辞し、翌朝「鶏の声にもよほされて」と後朝を装った文を届けるという「遊び」をしかけた。清少納言はその「遊び」に乗り、行成が帰ったのが午前1時になる前であったことから、「夜深く」鳴いた鶏、しかもうそ鳴き、と孟嘗君の故事を用いて、行成の不実さをなじる切り返しをしてみせた。行成はさらに、「函谷関」ではなくて「逢坂の関」の鶏、鳴いてほしくないのにせきたてられたと、あくまで後朝の文の形を装い続けた。それに対し清少納言は、「逢坂の関」ならばなおのこと、「夜をこめて」鶏のうそ鳴きをたくらんだとしても通行は許しますまい、と切り返す和歌を詠んだのである。「夜をこめて」は、行成が清少納言のもとを辞した、午前1時になる前という時間を指した表現ということになる。

現代の感覚では、「一晚中、鶏のうそ鳴きを繰り返しても」という、アラームのスヌーズ機能を彷彿させる滑稽味のある表現も、揶揄としては効果的なように思える。しかし、ある現代

語訳をあててうまく意味がとれることを理由に、古典作品を解釈することには慎重であるべきだ。

当章段の清少納言歌は、『後拾遺集』939にも入集する。

大納言行成ものがたりなどし侍けるにうちの御物忌に  
こもればとていそぎかへりてつとめてとりのこゑにも  
よほされてといひおこせて侍ければ、よぶかきける  
とりのこゑは函谷関のことにやといひにつかはしたり  
けるをたちかへりこれはあふさかのせきにはべりとあ  
ればよみはべりける

#### 清少納言

よをこめてとりのそらねにはかるともよにあふさかのせき  
はゆるさじ

『枕草子』を要約したとわかる長い詞書をもつのは、「とりのそらね」という語が函谷関の故事をふまえた表現であることを、情報として入れなければ、読み手に魅力が伝わらないからであろう。また、恋歌でないことは部立から明らかであるものの、「よをこめて」という時間に逢坂の関を越えようとくわだてる和歌は、当時の感覚ではありえないものであったはずである。『枕草子』に見える「丑になりなば悪しかりなん」という行成の発言こそないが、行成が内の御物忌に籠もるために帰ったこと、清少納言の「よぶかきける」という言を情報として示し、後朝の文を装ったやりとりという特殊な詠歌事情があったことを読者に伝える必要があったのだ。

『枕草子』第95段で清少納言は、自分が下手な和歌を詠むことで、父清原元輔の名をけがすことは避けたいと言っている。確かに清少納言は、同時代の赤染衛門や和泉式部のような歌詠みではなかった。しかし、相手がしかけてきた後朝の文を装うという「遊び」に乗り、和歌の常套表現はもちろん、漢籍もふまえて切り返すというのは、元輔の娘として面目躍如たるものがあろう。

さて、『枕草子』には記載されながら、『後拾遺集』には行成の返歌が採られていない。それは、「女性が逢坂の関を開けて待つ」という表現が、和歌における逢坂の関の詠み方から大きく外れているからだだろう。そのあたりに、後段で行成の和歌を「見苦しきこと」とする理由があると考えられるが、行成の返歌以降の当章段の解釈については、他稿を期したい。

1 『百人一首』では、二句が「とりのそらねは」になっているが、『枕草子』三巻本系統第一類本と『後拾遺集』では「とりのそらねに」である。三巻本を底本にしながら、「とりのそらねは」に改訂している注釈書類も多い。これについては、萩谷朴氏「『鳥のそら音にはかる』考—百人一首定家添削の罪—」（日本文学研究 25 1986年1月）に詳しい。なお、堺本・前田本には当章段が存在しない。「とりのそらねに」の「に」は、手段・方法を表す格助詞である。「はかなかる夢のしるしにはかられてうつつにまくる身とやなりなん」（『後撰集』871）、「とりのこゑにはかられて、いそぎいでて、にくかりつればころしつ」（『和泉式部集』870詞書）など、「はかる」の語が格助詞「に」をとる例がみられるため、本稿では「とりのそらねに」

として考察をすすめたい。

- 2 小林賢章氏「『夜をこめて』—いつ「鳥の空音」をはかったか—」（『暁』の謎を解く 平安人の時間表現 角川選書 2013年 初出2011年）。以下、小林氏①。
- 3 吉海直人氏「時間表現「夜をこめて」の再検討—小林論への疑問を起点にして—」（日本文学論究 第79冊 2020年3月）以下、吉海氏①。なお、吉海直人氏『百人一首を読み直す—非伝統的表現に注目して—』（新典社選書 41 2011年）第15章（以下、吉海氏②）は、当章段を「疑似恋愛ゲーム」と捉えており、首肯される。
- 4 『枕草子春曙抄枉園抄』（枕草子古註釈大成 日本図書センター 1978年）
- 5 『枕草子旁註』（枕草子古註釈大成 日本図書センター 1978年）
- 6 萩谷氏の『枕草子解環』三（同朋舎出版 1982年）も現代語訳は同じ。
- 7 『権記』（摂関期古記録データベース 国際日本文化研究センター 2021年8月30日閲覧）。倉本一宏氏『藤原行成「権記」(上)』（講談社学術文庫 2011年）も参照した。
- 8 『小右記』（摂関期古記録データベース 国際日本文化研究センター 2021年8月30日閲覧）
- 9 『新潮日本古典集成』頭注、『枕草子解環』三。
- 10 吉海直人氏「教室の内外（3）—『枕草子』・和泉式部日記・『源氏物語』二題・『徒然草』—」（同志社女子大学日本語日本文学 24 2012年6月）
- 11 群書類従26による。
- 12 小林賢章氏『アカツキの研究—平安人の時間』（和泉書院 2003年）、注2前掲書。
- 13 中野幸一編『源氏物語古註釈叢刊 第六巻』（武蔵野書院 1984年）。
- 14 小林氏①。
- 15 吉海直人氏「後朝を告げる「鶏の声」—『源氏物語』の「鶏鳴」—」（古代文学研究 第二次第29号 2020年10月）の指摘による。
- 16 『日本国語大辞典』（ジャパナレッジ 2021年8月30日閲覧）。新全集の『枕草子』第84段の頭注も「賞（め）でいたし」が原義で、非常に賞美すべきもの・立派なもの」と指摘する。
- 17 小林氏①はこの清少納言の発言を「午前二時に鳴くなんて、孟嘗君の故事に出てくる鶏かしら」としているが、「午前一時前に鳴くなんて」とすべきである。吉海氏①が指摘するように、ケアレミスであろうか。
- 18 『史記』九 列伝二（新釈漢文大系 明治書院 1993年）
- 19 小松光三氏「『夜深し』考」（愛文 19 1983年7月）
- 20 吉海直人氏『源氏物語「後朝の別れ」を読む—音と香りにみちびかれて—』（笠間選書 2016年）第一章 初出2010年。
- 21 藤本宗利氏「『枕草子』の宮廷文学的性格—「とりのそら音」をめぐる—」（『枕草子研究』風間書房 2002年）。以下、藤本氏の論は全てこれによる。
- 22 ただし、清少納言が詠んだのは、行成を自分のもとに留めようとする方向の関ではない。確かに、都から東国への通り道であることから、離別歌で「逢坂の関」が人を留めるものと詠まれることもある。  
あふさかにて人をわかれける時によめる  
なにはのよろづを  
相坂の関しまさしき物ならばあかずわかるる君をとどめよ  
（『古今集』374）

しかし、男性を留めるものとして逢坂の関を詠むのは、女性の立場の恋歌の詠みからあまりにも大きく外れていよう。行成の返歌にも「あけて待つとか」とあり、男性の訪れを待つ女性を「逢坂の関」と捉えているのであって、帰る男性を留めるものとしては捉えていない。

三の（c）で挙げた『伊勢物語』第14段の例では、男性が夜深いうちに帰ってしまったことに対し、女性が鶏を恨む歌を詠んでいる。

夜ぶかくいでにければ、女、  
夜も明けばきつにはめなでくたかけのまだきに鳴きてせなを  
やりつる

といへるに、

この第14段では、このような雅びとかけはなれた言に、男性の愛情が深まらない理由があることが示されており、当時女性の立場でこのような詠み方をした例とはみなせない。

23 ジャパナレッジ 2021年8月30日閲覧

24 ジャパナレッジ 2021年8月30日閲覧

25 小林氏①。

26 そもそも、行成は午前1時になる前に帰っており、当章段を「夜をこめて」の開始時点が午前1時である根拠とするのには無理がある。

27 小林氏①が挙げているのは、『枕草子』成立より時代が下った例がほとんどである。

28 ただし、「よをこめてあきたつ霧のひまひまにたえだえみゆるせたの長橋」（『拾遺愚草』590）のように、後代になると「夜が深い」にあてはまらない例がみられる。